

はる♥あべ
あかぎきん



もとたかあかぎん

あにた

風邪を引いた祖母に
栄養剤を届けに行く
赤ずきんちゃんできし
たが……

い●●●
あ●●●
か●●●

くわんぐわんぐ

くわんぐわんぐ

それをおおかみが
狙っていました。

あーんぐわんぐ

あーんぐわんぐ
あーんぐわんぐ
あーんぐわんぐ……

!!

超好み

※P数の関係で
展開早いです。

くわんぐわんぐ



あーっ、ふふー

えん

びび

あー

あ

あー



あわっ!

あー

セッ、フフ!

あわっ……



あわっ!

あー

あー



あれ
んんんんんんんん
なまんんんん

かな

かな

あ
あ
あ

さ...かな

あ

あ
あ
あ

あ

ーすかなぶうー

ミミクリクリ

バ
ハ
ン
ン

バ
ハ
ン
ン

あかずきんは
オラオラ系でした。



うっしょい
いーなまおまえ

ばんばん

ばんばん

うっしょい

あー!

あ

どどど
どどど
どどど

ぐわ
ぐわ

あ〜あ〜
あ〜あ〜

ぐわ

ぐわ

ちゅんちゅんちゅんちゅん
！ハハハ、ユーー

カシカシカシ

カシカシカシ

ちゅんちゅんちゅんちゅん
ちゅんちゅんちゅんちゅん

あ...

ジュジュ

あ...

ジュジュ

ちゅんちゅんちゅんちゅん
ちゅんちゅんちゅんちゅん

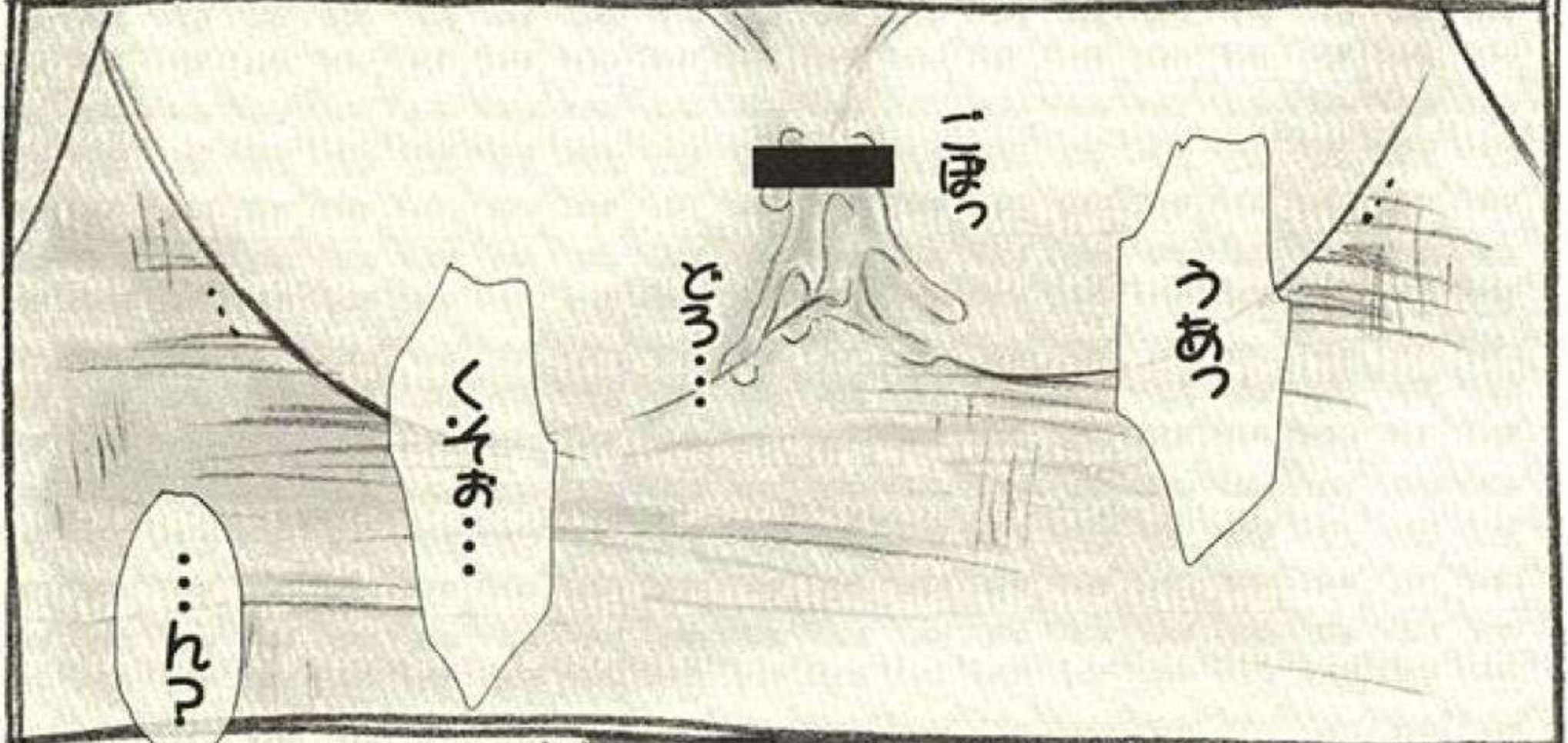
ジュジュ

またなな！



...う
...ん

な...ん
な...ん
な...ん



うん

うん

うん...

うん...

うん...



うん

うん

うん

うん

うん...
うん...
うん...



せせきつろくおのれは長が
うさつちつお和

取や
つけー!

おおかみモモカ

……おのれは……



おれー!

……

おしい
まるでし♡



おれー!

はるあべあかすきんにつづく!

おはせつてー
オしだんハタギ
食つてさー

←古い

おれー!

ちよなら赤ずきん

Good Bye, My Little Red Riding-Hood

「や……ああアッ……！ アッ、やだあ、ああ……つ、そ、こっ……！」
（なんでオレ、こんなことになってんだよ……！）

「や、じゃねエだろ……！ イイんだろーが、ここがよ……っ！」

「ヒッ！ やめ……！ やら、もう、んあ……、はあア……っ！」

冬も間近の静かな森の奥。緑の屋根の小屋は昼下がりのうらかな陽に包まれていました。小屋の窓の側の落葉樹から、赤や黄の色鮮やかな落ち葉がときおり舞い落ちて、湿った黒い土の上に積もっていきます。

のどかなこの風景にそぐわず、昼日中からベッドをぎしぎしきしませていかかわしい行為にふけているのは、二人の少年。

少年といっても、二人の体格にはずいぶんと差があります。

着衣のままベッドに横たわり、ズボンだけ少しずり下げている

少年は、一四、五歳でしょうか。

やや細身ながらも背丈はベッドから足がはみ出しそうなほど。

吊り上がった両の眉と双眸、長めの前髪にすっと通った鼻筋。ひどく整った顔立ちの少年が、自分に「乗っからせた」獲物がびくびくと切なげに腰を震わせるのを楽しそうにニヤニヤ眺めている

——その光景はどこか無邪気な雄の残酷さを思わせます。眼光

鋭く人を食ったような不遜な表情で、べろりと舌なめずりをする様子は、とらえた獲物をいたぶって楽しむ肉食の獣のようです。

一方、もう一人の、騎乗位で素っ裸のカラダを貫かれているほうは、まだほんの子ども。

黒目がちの大きな瞳のたれ目に丸みの残る頬、肩も腰も頼りなく、男というより子どもの風情。実際、局部はつるつるです。それなのに、割り広げられた丸尻の奥の穴に雄の欲望をずっぶり根本まで啜え込まれているのです。とろんと潤んだ目と紅潮した頬、息を熱く荒げ、明らかにそこで肉の快感を感じているのが、幼げな顔立ちのせいで余計に卑猥で背德的です。

「オラ、もっと自分で腰使えつての……！ オレが疲れんだろーが」

ぐい、と腰骨を両側からつかんで真下に引き下ろされると肉棒がより深く穿たれて、たれ目の少年は背を弓なりにそらし、悲鳴じみた喘ぎを放ちました。

「つたく、声でけーんだよ、エロガキ。ま、誰もいねエんだからいーけどよ。……んで、ココつかまれると、もっとイイんだよな」

そう言うや否や吊り目の少年は、自分の屹立を深々と埋め込んだ尻の割れ目の終わるところ、そこからはえているものの根本をぎゅつと強く握り込みます。

はえているもの……？

そう、たれ目の少年の尾てい骨のあたりからは、普通の人間にはあるはずのないもの、ふさふさとしたシルバーグレイの立派な尻尾がはえているのでした。

「ふあ、あつ やあア——……っっ！イ、くううっっ!!」

「はッ、……イケよ、淫乱」

嘲るように吊り目の少年は言つて、腰をいっそう強くずんずん突き上げ、追い上げます。

(イヤなのに……こんなこと、脅されて、無理やりされてんのに、

——なんで、オレ は……!)

尻尾だけではありません。びくんびくんと全身を大きく震わせ頸をそらし、のけぞって絶頂に達するたれ目の少年の頭部には、通常の位置についている人間の両耳とは別に、三角の、短い毛に覆われた獣の耳が二つ、黒い短髪の間からひよこりとのぞいていました。

たれ目の少年の名はタカヤ、吊り目の少年は元希——二人が出会ったのは、今から一〇日ほど前のことです。

*

「いってらっしゃい! おばあちゃんによろしくね。」

「うん、いってきます」

玄関先でお母さんにずっしりと重い籠を渡されたタカヤはいつものように無愛想に答えました。村から一時間半ほど歩いた森の奥の小屋に一人で住んでいる偏屈ものの父方のおばあちゃんに、恒例の届け物をするのはタカヤの役目なのです。

「夕方、暗くなるまでに帰ってくるのよ。」

赤いフード付きの膝丈のマントの下には深緑のピロードのフレアスカートがのぞいています。足元は焦げ茶の編み上げのブーツ。マントは首もとにつけられた黒い幅広のサテンのリボンで蝶結びにとめられて、格好だけ見れば可憐な少女のようです。

「タカ、森には旅の人もいるかもしれないからね。しつかり頭巾をかぶっていくのよ!」

お母さんはタカヤの背中に声をかけます。

タカヤは振り返りもせず、わかっているよ、と少しうるさそうに言つて頭巾を目深にかぶり直し、おもむろに歩きはじめました。

夏でも山頂の雪が溶けることのない高い山、その山裾に広がる黒い森の縁に少年タカヤの住む村があります。

村から森の中へと続いている小川に沿った小道を、タカヤはスカートをばさばさいわせながら大股でずんずん歩いていきます。やがてあたりは鬱蒼とした森の風景に変わっていくのでした。

タカヤが乾いた枯れ枝や落ち葉を踏んで通ると、森の小鳥やリス、モグラは人間には聞き取れない声でおしゃべりします。

(あ!赤ずきんだ……)

(赤ずきんの仔だね……!)

(……この前よりちよつとだけ、背が伸びたかな?)

当のタカヤは自分が噂されているとはつゆ知らず、あたりに目を向けることもなく、黙々と歩いて行くのですが。

「赤ずきんの仔」——実は、タカヤの住む村には昔からときどき獣の耳と尻尾をもった子どもが生まれるのです。そして、古くから「赤ずきん伝説」が口伝えに伝えられています。ちまたによく知られている『赤ずきん』の物語は子ども向けに改変されたもの。村の伝説はそれとは違っています。

——いわく、赤ずきんのよく似合う美しい村娘と、狼の姿をした森の神が出会って禁断の恋に落ち、一夜の契りを結んだ。身ごもった娘は一人森の小屋に隠れ住んで(獣の)耳と尻尾をもつ子どもを産んだ。後に娘に惚れこんだ狩人は、娘と結婚し、子ど

もともとも村に連れ帰った。それ以来、村は森の神の加護を受けようになった……という、一種の異種恋愛譚なのです。

ですから、一两年前、久しぶりに村に耳と尻尾をもつタカヤが生まれたとき、誰も嘆くことはありませんでした。村では「赤ずきんの仔」は気味悪がられたり苛められるどころか、森の神に今も村が守られているという証であり、言祝ぐべき存在なのです。タカヤの尻尾の形状は狼というよりは猫のものに近かったのですが、誰もそんな細かいことは気にしませんでした。

ところで、生まれてきた「赤ずきんの仔」が男でも女でも、成人して結婚するまで女装で育てるのが村のしきたりです。これは、神の寵愛を受けた元祖赤ずきんの娘にあやかっただけのこと。

そして村の外に出るときには必ず、赤ずきん（というか、フー・ド付きのマント）で獣の耳と尻尾のある尻をすっぽり覆い隠すことになっています。

言い伝えを信じている村人たちが「赤ずきんの仔」に危害を加えることはありません。だけど一歩村の外に出たら話は別。耳や尻尾が見つかったら獣人として攻撃されたり、悪くすると捕まっただけに入れられ、見世物にされるかもしれません。

実際、村と接している森に村人以外が入ることは滅多にないのですが、旅人が絶対いなくても限りません。だから、おばあちゃんの小屋へのお使いのときには、お母さんはタカヤにすっかり赤ずきんをかぶらせるのです。

タカヤは、高齢になった今も森で気ままな一人暮らしを貫いているおばあちゃん（恰幅がよくタカヤの父の隆に顔がそっくりです）のお気に入りでした。変わり者のおばあちゃんは、一見ぶつ

きらぼうで無愛想ですが、その実思い込んだことには一途で、不器用で健気なタカヤのよき理解者なのです。

料理上手のお母さんがつくった食べ物や森で手に入らない日用品を手みやげに、定期的にタカヤが訪ねてくるのをおばあちゃんには心待ちにしています。普段決して愛想のいい子どもではないタカヤのほうも、自立精神と冒険心に富んだ豪気なおばあちゃんを好きでしたから、森へのお使いは嫌ではありません。

サーモンパイと栗の渋皮煮、キノコのキッシュにスイートポテト、レバーのパテとサワードウのパン、それに自家製の鴨の薫製……たくさんの食料で腕に食い込むほど重い籠を持って、今日もタカヤは小屋の水色の扉の前に立ったのでした。

「おばあちゃん、こんにちわ！」

ところが、コンコンと扉を数度ノックしても返事がありません。「タカヤだよ、いねエの？おばあちゃん！」

何度か大きな声で呼びかけても、返事なし。きつと近くに薪拾いにでも行ってるんだらう、とタカヤは思いました。

「あれ……？」

よく見れば、扉の鍵が壊れています。万事にアバウトなおばあちゃんは昼間は鍵なんてかけません。とはいえ、壊れてるのは不用心だな、と子供心に思いながら、小屋の中で戻ってくるのを待つてよう、と、扉をガラリと引き開けました。

籠をその場におろし、ふう、と一息ついて部屋を見渡します。

「あ……！」

すると、部屋の奥、窓際に置かれたベッドがこんもりと盛り上がっているのにタカヤは気づきました。

「なあんだ、おばあちゃん、昼寝してんのかよ！」

めずらしいなあ、元氣者のおばあちゃんが昼寝なんて、と思い

ながら、タカヤは無警戒にベッドにすたすた近づいていきます。ベッドのすぐ側まで来て身を乗り出し、頭からすっぽり布団をかぶっている「おばあちゃん」に呼びかけました。

「おばあちゃん、おばあちゃんの好きなサーモンパイ、お母さんが今日はすごくうまく焼けたって……」

それでも何も反応がないので、タカヤはいぶかしく思い、そして急に心配になりました。

(もしかして昼寝じゃなくて、どっか具合悪くて寝てんのか?)

「なあ、おばあちゃん……!!」

タカヤが盛り上がった布団にふれようとしたそのとき、がぼつ、とそれが跳ね上げられ、黒い影が中から飛び出してきました。

「?!?!?!」

驚愕に声も出せないままにタカヤは足をざつと払われ、ベッドサイドの床に仰向けに突き倒されました。思い切り叩き付けられた背中の痛みにうめき声を上げると同時に、四肢を強く押さえ込まれます。完全に身動きをとれなくされてからようやく、自分に馬乗りになっているのが若い男であるとわかりました。

「!! アンタ、誰、だ……っ!!」

若い男……?——息を少しだけ荒げ、爛々と光る吊り上がった目で床に押さえつけた自分をギロリと睨めつけているのは、どうやらまだ大人にはなり切っていない少年のようです。

「……なんだお前——タカヤ、って名前、それに、その声……女じゃねえよな?」

なんで女の格好してんだよ、ヘンタイかお前?、と口を開いた少年の声はどこか底冷えがするような凄みがあつて、タカヤは息

を飲みました。

タカヤの質問には答えず、間髪入れずに少年はタカヤの首筋ギリギリに、ダン、と音を立ててナイフを床に突き立てました。そして首に左手をかけられ、ぐつと力を入れられるとたちまち息が詰まって、目の裏が赤くなります。

「逆らったり暴れたりすんなら、すぐ殺す。」

聞かれたことに答えるよ……お前、一人でここに来たのか?

タカヤはこくと小さくうなずきます。

(どうなってんだ?! 一体コイツは誰なんだ? おばあちゃんは、どこにいった?!)

本当だな、と念押しされ、首を絞める手の力がさらに強められ、タカヤは恐怖と混乱で頭がパニックになりそうです。コクコク、と必死にうなずくと、どうやらそれを信じたらしい少年はふつと息を吐いて、左手を緩めました。

「ガキ一人か——びびらせやがつて……」

タカヤは身体を横向きに丸めてゴホゴホと咳き込みます。その拍子にかぶっていたフードがはらりと頭からズレてしまいました。

「——! お前、なんだこの耳?!」

はつと気づいたときには、時すでに遅し。

シルバーグレイの毛の生えた三角の耳を馬乗りになっている少年にむんずとつかまれタカヤは言葉にならない悲鳴を上げました。獣の耳と尻尾の感覚は非常に敏感で、普段洗うときにそつと自分でふれてもびりびりするほどなのに、ふいに乱暴な手つきで思い切りつかまれたんだからたまりません。

「ひ……っ! うあ、あ……、やアツ!!」

「へえ……!!」

吊り目の少年は興味深げに目を見開きます。

「いああ……いつ…、やめ、ろ…っ！」

きらんと光る眼はさながら生きのいい獲物を見つけた獣のよう。

「いやア……さわ、んなあ、やだ……痛エ…やめ…て……！」

ぶるぶると頭を震わせ、全身を縮こまらせている様子をおもしろがるように、代わる代わる両方の耳をぐいぐい引っ張って弄りまわします。

「おもしれエの…さわるだけで痛エんだ。びくびくしてやがる」

弱点をいたぶられて身体に力の入らないタカヤが、拒絶の言葉を上げるだけでろくに抵抗もできないのを、じいっと眼光鋭く見下ろしているのです。

「そっか！、お前、もしかして……！」

そのうち、何かに勘づいたらしい少年は、タカヤの身体をごろんとひっくり返しうつぶせにして、下半身を覆う緑のフレアスカートをまくり上げようとします。

「——！」

(まずい、尻尾が……！)

耳に続いて尻尾までこの得体の知れないヤツに見られちまう、と、タカヤは必死に手足を振り回しバタバタもがいて少年の身体の下から逃れようと抵抗しました。が、体格にも運動能力にも二人には格段の開きがあり、なんなく押さえつけられてしまいます。

「いやだ…っ、見んなあ…っ！、やめ、ろ…っ！」

ばさりと大きくまくり上げられたスカートの下、白い女物の小さな下着で覆われている丸い尻の割れ目の上。

数十センチの長さの、やはりシルバークレイのすらりとした美しい尻尾が、今は恐怖にブルブル震えているのを目の当たりにし

て、少年——元希は思わずごくりと息を飲みました。

「——やっぱり！ お前、『赤ずきんの仔』か！」

さて、それからの数時間に起こったことは、タカヤのキャバシテイを完全に越えていました。性の知識のほとんどなかったタカヤは当初、自分の身に何が起こったか理解することさえできなかったのです。

「『赤ずきんの仔』と交わると厄払いになり強運が得られる……つまりは『赤ずきん』あげまん説」は、広く知られた赤ずきん伝説の一部です。

少年元希は迷信深いタチではありませんでしたから、その俗説を頭から信じたというわけではありません。

が、決して似合っていない女の格好をしたタカヤが急所らしい耳や尻尾にふれられて身悶える妙に倒錯的な色気と、このときの元希の中にくすぶる鬱屈した昏い欲望を結びつけるには十分でした。(このチビを犯したら、ちったあすつきりすっかな……そういやずいぶん抜いてねエし。左膝の傷ももう大分よくなってるから注意して動きや平気だろ。)

震える尻尾の下、白い下着に包まれた丸い小さい尻を手のひらで鷲掴みにすればもっちり柔らかくて、ヒツ、と怯えて喉を引きつらせる「タカヤ」の悲鳴が心地よく元希の耳に響きます。

(……コイツ、ひぐひぐ半ベソかいてんくせに往生際悪く暴れやがって…。さっき腕振り回したとき爪が当たって顎んとこがちよっと切れたっつーの。今だって生意気にこっちを睨みつけてやがる、涙目で。この状況でオレにケンカ売ってんのか？)

——決めた………痛めつけてぐちゃぐちゃにして、泣かしてやる

赤ずきんとスカートは手荒く脱がされた分だけマシで、可憐なフリルのついた丸衿のブラウスはボタン全部を引きちぎられて取り去られ、ぼいと投げ捨てられました。

元希は、丸裸に剝いたタカヤをおもむろにベッドに引きずり上げます。そして、何をされるのかわからない恐怖にいいよバニツクになって大声を上げて暴れるタカヤの下腹やら鳩尾を躊躇なく数発拳で殴りつけました。

そして、ぐったりとおとなしくなってしまったタカヤの股を大きく開かせます。

自身をしごき立て挿入できる硬さになると、少しも慣らしてやりもせず唾をなすりつけただけのそれをタカヤの後腔にあてがい、腰を進めて無理やりに挿入しました。

「うああああ——！！」

経験したことのない痛みにはタカヤは絶叫しましたが、深い森の奥、誰にも聞こえることはありません。

「クツソ……きつ……なかなか、入んねエ……！」

キツすぎるタカヤの締めつけは挿入する元希にもかなりの痛みを与えましたが、それよりも自分のものでタカヤを引き裂いて、苦痛と恐怖に涙させる嗜虐的な喜びのほうが勝っていました。

徐々にじりじりと挿入を深め、最後には自身すべてをタカヤの小さな尻の中に埋め込みました。

「——こんで、やっとなんか、入った……」

無理やり身体を裂かれる痛みにはタカヤはすでに息も絶え絶えで、泣きながら切れ切れに、やめて、痛い、と繰り返すばかりです。

女性器のように潤滑液が出るはずもない肛門に、ほくしもせず無理やりにねじこんだのですから、どこかが切れたのか、かす

かに血なまぐさい匂いがします。それが元希の獣欲に火を着けたらしく、自分のいいように好き勝手に動きはじめました。

さぞ痛くて苦しいのでしよう、無力な子どもが恐怖にひきつった表情で、こぼれそうな大きな黒いたれ目からぼろぼろと涙を溢れさせるのを見下ろし、元希の心はずいぶん満足しました。

さんさん最奥まで突いて一度思い切り中に放ちましたが、若い狼のような身体の欲望は全然衰えません。

「まだおさまんねエ……」

今度はうつぶせにしたタカヤの腰を掲げさせ、休む間もなくバツクからずぶりと貫きました。出血と中に出した精液のせい或少し滑りがよくなったようです。

タカヤはもう拒絶の声すら上げられず、うつぶせに突っ伏して枕に顔を埋め、力なく突かれるまま。

「やわらけーケツ。こんな血出でてほんと処女犯したみてエ……」
それでも、丸くぶにっとした尻たぶの肉を元希の両手でむにむに揉まれると、くぐもった悲痛な声を枕に漏らすのでした。

数時間後——血とよだれと涙と汗と、よくわからない液体とで、ぐちゃぐちゃに汚れたシーツの上。

ベッドに足を投げ出して座った元希は自分の両足の間にタカヤを座らせました。自分の胸にタカヤの背をもたれさせ、細い上体を囲うように両腕を回します。

暴行の間中、少しでも抵抗するそぶりを見せれば容赦なく殴りつけられたので、タカヤはいまやすっかり気力も尽き果て、元希にされるがままです。

ほんやりうつろな目をしたタカヤの身体中いたるところに、青

紫や赤紫のアザやら噛み跡やらキスマークが無気味に散らされています。乾いた涙のあとの残るやわらかな頬を撫でながら、元希はタカヤの耳元で言いました。

「あー……まじですつきりした。」

おい、お前セックスすんの、はじめてだろ？ タカヤ

(…これが、セックス……オレ、セックスした、のか……男なのに——男に、犯されて……)

「お前も、はじめての男の名前くらい知りてえよな、やっぱ。」

——オレは元希だ。よく、覚えとけよ。も、と、き。

……つか、言ってみ？ ああ？ 『元希さん』ってよ。ほら今、呼んでみるよ。『もときさん』……

オラ、言えって！ んん？ 口ぐらいきけんだろ」

元希はそうどこか楽しげに言っつて、つんつんと長い指でタカヤの頬をつつきます。

(なんなんだよ、人のことさんさんレイプしといて……なんでこんなひでえことするヤツのこと、オレがさん付けで呼ばなきやいけねえんだ……意味わかんねえ……)

痺れ切ってぼうつとする頭でタカヤはうっすらと思いましたが、この獣に言っても話を通じることにはなさそうです。この上また暴力を振るわれるのも嫌で、投げやりな気分でも口を開きました。

「……もと き、さん……」

視線を斜め下に向けたままかすれた声でそう口にしましたが、何も応答がありません。

いぶかしく思っつてタカヤはのろのろと視線を横に向けました。

「——！」

あんなひどいことをしたとは思えないほど綺麗に整った顔で、

元希が自分をわずか数センチの至近距離から覗き込むようにじいっと見つめています。ぼつちり目が合っつてタカヤはなぜだか心臓がどきんとしました。

「いーな、ソレ……気に入った」

切れ上がった両目には今はもう剣呑な昏さはありません。澄んだ夜空に明るく輝く星のように強くきらきらしていて、まるで引き込まれそうです。

タカヤはなぜかどきまぎして、慌てて目をそらしました。

(——今、何時なんだろ……?)

はたと窓の外を見れば、空はオレンジの薄闇。完全に日没間近の色です。

「——オレ、もう、帰んねえと——！お母さんが、暗くなる前に帰っつて来いっつて……」

元希は腕の中のタカヤが焦ったようにそう言うのを聞いて、しばし思案しました。

(そっか、そーだよな……。親が家で待っつてるガキだもんな……)

「お前がここに来たこと、母親は知っつてんだよな？」

タカヤはうなずきます。

(なら、コイツが帰んなかつたら、探しに来る。それはマズい……)

「おい、お前のパーズン奪つたはじめての男について、いいこと教えてやるーな」

元希はひよいとベッドから降り、落ちていたズボンに乱暴に足を突っ込みました。散らばつたタカヤの服を集めて戻っつてきます。

ボタンの飛んだブラウスをベッドの上に乗せたと座つたままのタカヤの肩にふわりとかけてやっつてから、手にした抜き身のナイフでタカヤの柔らかい頬をびたびたと叩きました。

「いいか？よく聞けよ。オレはな、泣く子も黙る盗賊団、群狼団のリーダーの元希さまだ。」

タカヤは思わず息を飲みました。ここ数年、国中を好き放題に荒し回っている、悪名高き盗賊団、群狼団……

「お前みてえなチビでも群狼団の名前くらい聞いたことあんだろ？ さすがに。」

狼の群れのように残虐で悪辣な盗賊集団の名前は、世間知らずのタカヤでも知っています。

「この前の仕事でちよつとしくじってケガしちまったからよ、少しの間ここを借りて療養してたつてわけだ。」

「え……？でも、そんなじゃ、おばあちゃんは……？ ここ、オレのおばあちゃんの家だ！」

「そんなん知るかよ。オレがここに来たときには誰もいなかったから、鍵壊して入っただけだ。おばあさんなんて見てねーし」

「……………」

「今もな、数十人の仲間が森の中に分かれて潜伏してる。この小屋のすぐ側にも、な。リーダーのオレの完全な回復を待ってんだ。」

オレの号令一つでせいっらは何でもやる命知らずの荒くれ者たちだ。……お前、今日、食いもん持ってきたんだよな。」

扉の側に置かれたままの籠に元希ちらりとは目をやりました。

「そーだな、……明後日、またなんか持ってここに来い」

「！」

「もちろん、オレがここにしていることは誰にも言うなよ。もし来なかったり誰かにしゃべったりしたら、お前の村を仲間たちに襲わせて、村人全員皆殺しにしてやる」

元希の言葉に、タカヤはたちまち蒼白になりました。

(よしよし、信じてやがる……。今のコイツの様子なら、オレ様のでたらのハッターリで丸め込めただろ。完全に膝が治るまで、まだしばらくはここを動かたくねえ。子どもが一人で歩いてるくらいだから、どうやらこの辺にはまだ追っ手は来てねえようだしな。)

それから、空の籠を持って小屋を出たタカヤは、ふらふらとおぼつかない足取りで家路をたどりました。

(オレ……無理ありあんなことされて……なのに……また、アイツのどこに行かなきゃならないなんて……！)

でも、誰かにしゃべったら、村が襲われる……。母さんや父さんや匂が、群狼団に殺されたら……！ もしかして、おばあちゃんだつて、アイツらに殺されちまったのかも？……オレ、どうしたらいいんだ……)

ぶるっ、と夜気に身体が震えた瞬間、何度も中に吐き出された元希の精がドリと後腔から溢れてきて下着を濡らしました。そのぞつとするおぞましい感触に、また涙が込み上げてきます。

身体の奥まで汚されて、自分がたった一日で今までとはまったく違う墮落した生き物になってしまった気がします。胸が塞がりそうに苦しくて不安でした。そして同時になぜか、強く輝く元希の両目の光が頭から離れないのです。

(あんなきれいで可愛い目、はじめて見た……)

タカヤが、めちやくちやに傷つけられた身体で混乱した精神状態にありながら、道に迷うことも小川に落ちることもなくどうにか自分の家まで無事帰れたこと自体、森から特別の加護を受けていたからかもしれせん。

それが一〇日ほど前の出来事です。

深い絶頂の余韻にまだ動けないタカヤをベッドに放置したまま、元希はシャツだけ羽織っておもむろにタカヤが持ってきた籠を漁っています。なんだ、今日は肉っぽいのがねえじゃん、しけてんな、と言いなながら、床にどっかり座り、白パンに木いちごのジャムと蜂蜜をたっぷり塗りたくってむしゃむしゃ食べはじめました。あれから当たり前のように、タカヤが来るたびに元希はタカヤを犯しました。もちろん、元希は最初からそのつもりだったので。タカヤをレイプして非常に「すつきりした」こともあり、食料調達兼性処理のためにタカヤを脅迫することにしたのですから。ベッドのそばの木の椅子の背には、白いブラウスと朱色のコーデュロイのジャンパーズスカートがかかっています。最初るとき、ブラウスのボタンが全部なくなってお母さんへの言い訳に苦労したので、タカヤは次からは自分で服を脱ぐようにしたのです。

逆らったら村を襲う、という脅しをすっかり信じているタカヤです。もはや暴れたり抵抗したりはしません。それなのに、目つきが悪くて気に入らないとか、口のきき方が生意気だとか、もしくは何の理由も言わずに、元希は面白半分にタカヤを痛めつけました。セックスの最中にも、その前後にも、嘔んだりつねったり、殴ったり蹴ったり。親にバレると具合が悪いので、見える部分に明らかな跡を残すようなことはしないのですが。

別に元希はタカヤが本当に気に入らないわけではなく、むしろ気に入っているから脅して呼び出しているのです。

無力な子どもが自分に支配されて怯えて、泣くまいと意地を張りながら結局はペソをかく。その上、無理やり犯されてるくせに身体は感じてしまい、そのことを恥じて苦しんでいる。

逢瀬を重ねるごとに、ますますコイツは可愛らしくてたまねエ（からますます苛めたくなっちゃう……）と、元希は内心想っているのです。

そう、遠く神だか狼だかの血を引くタカヤの身体はやはりどこか普通の人間とは違うのでしょうか。男の欲望を受け入れる受け身のセックスに天賦の才があったのです。出血したのは初回だけで、次からはタカヤの後腔は切れることもなく（戸棚の中にあつたハンドクリームで挿入前に自分でほぐさせるようにしました）、元希の大きなものをキツく熱くしつかりと啜え込みました。元希が快感を得ようと普通にピストンするだけで、タカヤは本来は排泄器のはずのそこで女のように快感を感じるのです。

いつも最初だけは涙目で気丈に元希を睨んでいるタカヤですが、ほどなく感じ過ぎる身体に引きずられ、最後には元希のものでぐずぐずにとろかさされて我を忘れるほど快感に溺れてしまいます。後ろに雄を啜え込んでいるときには身体の他の部分も一段と感じやすくなるようです。とくに乳首をいじってやるときゅんきゅん穴を締めつけて反応するのがおもしろくて、元希はいつも胸を執拗に責めてはタカヤを啼かせるのでした。

濃いページピンクの乳輪の部分ペろりと一舐めするだけで、たちまち乳頭がぷくりと勃起してきます。タカヤは女みてえにこんなところでも感じんだ、子どものくせにホントにやらしいな、と言葉でも苛めながらこりこりとした肉の粒を強く吸ったり歯を当てたりして愛撫してやるとたまらないようで、ひいひい喘ぎながら透明な先走りをタラタラとこぼすのです。

「赤ずきんの仔は気が強く情が深くて身体は淫乱」——以前盗賊仲間から聞いた与太話は当たってるのかもしれない、と元希

は思いました。

パンをあつという間に食べ尽くした元希が、籠の底のほうを探ると、クランベリー、レーズン、ナッツがぎっしり詰まった歯ごたえよく香ばしいビスコッティが油紙に包まれていました。

タカヤは自分のおやつをとっておいたり、こっそり台所や納屋から食べ物を見つけてはここに持参しています。そう頻繁におばあちゃんのところに届け物をするのは不自然ですから。

「これうめーな！このカリカリしたやつ、これもお前の母さんがつくったんかよ？」

元希がそう言うと、タカヤは、そうですけど、と横になったまま答えました。

「……………アンタの、親は……………」

「へ？」

元希がビスコッティをくわえたまま振り返ると、タカヤはぼつが惡そうに目をそらし、それきり口をつぐんでしまいました。

目と目が合った一瞬、タカヤのひそめられた眉、黒目がちの大きなたれ目から哀れみみたいなものが自分に向けられていたのを読み取って、元希は瞬時にイラつとしました。

立ち上がってパンパンと手を払って、ベッドに足を向けます。「アンタじゃねえだろ、元希さんって呼べつってんだろーが。」

…親なんて顔も覚えてねー。頭領に聞いた話じゃオレを売っばらった売女は流行病に罹ってたらしいからすぐ死んだだろうってよ。元希はベッドの背もたれに背を預けて座り、傍らの裸のタカヤの腕をつかんで促し、向かい合わせに股の上に股がせました。うつむいて気まずげなタカヤの耳元に嘲るように言います。

「なにお前、オレに同情してんの？は！ナツマイキだったの……………」

耳を強めに噛んでやると、タカヤはぶるりと身を震わせます。

ケガをした元希の左膝に負担をかけないよう、交わる体位は主にタカヤが腰を振って動くようなものがほとんど。この対面座位もタカヤの乳首や鎖骨あたりを責めやすいので元希は気に入っています。

「ケツ上げろ。」

命じられるままに、元希の両股の外側に手のひらをついて、そろそろとタカヤが自分の尻を持ち上げました。

「二回目する前に、指で中、いじってやるーな。タカヤ好きだろ？イった後、オレの指でぐちゃぐちゃケツ掻き回されんの」

「い…好きじゃ、ない……………」

「嘘つけ。」

一度絶頂に達すると、タカヤのそこは輪をかけて敏感になります。ひくひくと熱を孕んでうごめいている、赤らんだ肉壁の入り口に元希は長い指をずぶりと二本奥まで突っこみました。

「ケツん中オレの出したので濡れてら…女みてーだな、チンコさえなきや。こうやってぐりぐりされんの、大好きなんだよなあ？」

「……………ふあ、ああ……………や、アア…っん…や、だ、あ…っ……………」

M字開脚させているタカヤの膝ががく震えました。指を食い締めてくる肉壁の奥を引っ掻くようにすると、ぶちゅり、と中出しした精液が溢れ出てきて元希の手を汚します。

「指、ぎゅんぎゅん締めつけて『やだ』じゃねーっての。」

尻尾の根本をぐつとつかむと、タカヤは息をひゅつと飲みました。そのまま二、三度、ぎゅむぎゅむ手のひらで尻尾を揉むように刺激します。元希の股の上数センチ、自力で懸命に持ち上げられている丸い尻たぶはブルブルと震えていました。

「あー、もう膨らんできたぞ、タカヤのイイところ。」

ギョツと耐えるように目をつぶり口を引き結んでいるタカヤは元希の言葉を否定するかのように首をふるふる左右に振ります。

(どういう仕組みなんだろうーな、これ)

タカヤの尻尾を刺激すると、なぜか肛門の中の前立腺がぶつくりと膨らむのです。その部分を直接指で撫でるように刺激してやると、タカヤの意志とは関係なく、幼げな性器はすぐに勃起します。そのまま刺激を続けられればほどなく、半透明な液をダラダラとこぼしながら身体中をびくびく痙攣させ続ける、いわゆる「イキっぱなし」状態に陥るのです。理性も吹き飛んでしまう強烈な快感は恐ろしいらしく、タカヤはそれをとんでも嫌がります。

「や、だ……っ……も……はあ……んう……やめ……っ、あ……」

みるみるうちにタカヤの耳元も首筋もしつとりと汗ばんで紅潮してきました。

「目え開けて、自分のチンコ見てみるよ。ケツいじられてびんびんにおっ勃てやがって、いやらしいやつ。」

尻尾をつかむと前立腺が膨らむのを発見したのは初回のレイプ時でした。

尻を血まみれにして力なく突かれるばかりのタカヤの尻尾の根元を何の気なくつかむと、穴の内部のある部分が膨らみ、それまでただぐったりしていたタカヤが急に色づいた喘ぎ声を上げはじめたのです。カリがそこを擦るような角度でえぐってやれば、たちまち甘い声でアンアン喘ぎはじめ、それまで痛みに固くこわばっていた身体も心なしかふんわりと緩んできたのでした。

「犯されてんのお前、初めっからケツでイったじゃん——
朦朧としていた初回の記憶は定かではなく、元希にそう嘲られて

も最初は信じられなかったタカヤです。しかし、それからセックスの回数を重ね、その度に底のない真つ暗な穴に落ちていくような快楽に突き落とされて翻弄され、認めざるをえませんでした。自分の中に眠っていた生来の淫蕩な性質が、「はじめての男」である元希によって否応無しに拓かれてしまったことを。

(こわい……感じたくなんてないのに、なんで……?)

盛った雌の獣みてえにみじめに喘いでるオレを、元希さんはいつもあの目でじいっと見てて、それが怖いのに、ぞくぞくして、きもちくて……ぜんぜん逃げらんねエ……いつそ、ばりばり思い切り食われたほうが楽なのに、ああ、早く——!

「——もとき、さ……もう、……ああ……っ、く……う……もう……」

「もう、なんだよ? ん? はつきり言えよ」

タカヤははあはあ熱い息を吐きながら、震える両手をベッドに突っ張って体を支え、元希の怒張の先端に指を咥え込んだままの尻のあわいをこすりつけます。「挿れてほしい——精一杯のあからさまなおねだりでした。尻尾も、汗で濡れた黒髪からのぞいている獣の耳も切なげにふるぶると震えています。」

「——人間なら、ちゃんと言葉で言えっつての」

意地悪くそう言っただけでタカヤの胸の乳首を強くつねり上げて、はしたない振る舞いにお仕置きをくれてやります。

タカヤは痛みに叫んでのけぞり、もう身体を支えていられなくなつて、がくりと元希の胸に倒れ込みました。痛い、やめて、と懇願しながら、頬を擦りつけて自分にすがりついてくる哀れな獲物に、元希は残酷に囁いてやります。

「オレに食ってほしいなら、そうお願いしろよ。教えたる? この前。」

またぎゅつと尻尾を握られて、もうタカヤは限界でした。

耐えられず教え込まれた卑猥な言葉を口にすれば、堰を切ったようにぼろぼろ涙が溢れてきます。頭がかあつと熱く赤く沸騰して、息も荒げずニヤニヤ自分を見ている憎いはずの目の前の男だけが自分を救ってくれる運命の相手のような気さえしてくるのです。切ない宙ぶり状態が辛くて、助けてほしくて泣きながら首にすがりつけば、元希はタカヤの痴態に愉快そうにくつと笑います。チビガキのくせに欲しがりインラン、そう言われながらも、ぐいと腰をつかまれ、待っていた熱い乾立で最奥まで串刺しにされてようやく、ああこれでもう何も考えないですむんだ、と、タカヤは最後の理性を手放したのでした。

*

タカヤが家にたどり着いたのは夕闇迫る時刻でした。冬が近づき、一日一日、日が短くなっているのです。

窓からはすでにオレンジ色のランプの灯りが漏れていました。ドアの向こうからは談笑している気配がします。弟の匂のはしやいだ声も聞こえてきました。

(誰かお客さんでも来てんのかな……?)

ただいま、とドアを開けた次の瞬間、タカヤは驚愕して、空の籠を手から取り落としていました。

「兄ちゃん！ おかえり！。遅かったね！」

「おかえり、タカヤ」

食卓を囲む椅子の一つに、なんとおばあちゃんが腰掛けていました。こつちを見てニコニコ笑っています。

「おばあ、ちゃん……！」

驚きに目を見開いているタカヤの様子に気づかず、台所からお

母さんは言います。

「タカ！ まったくもう、遅いから心配するじゃない。ユウトくんち？ アズサくんとこ？ たまにはうちでも遊べばいいのに……」

食卓の上には、山菜の水煮とヤマメの佃煮の瓶詰め、饅頭の箱などが置かれています。

「しばらくね、山の向こうの温泉に行つてたんだよ。本格的に寒くなる前にね。あ、本当に、いいお湯だった。」

「……そ、そうなん だ……」

おばあちゃん、オレも温泉行つてみたい、今度オレも連れてつてよ！ と、匂がお土産らしいけん玉を手にしなげらうと、うんと遠くてたくさん歩かなきゃいけないから、匂にはまだ無理だろうよ、もっと大きくなつたらね、とおばあちゃんは答えます。

「せっかくだからひさしぶりに皆の顔も見たくなつてねえ、森のわが家に帰る前に、ここに立ち寄つたのさ」

(……よかった……おばあちゃん、無事で……！ 元希さんの言つてたこと、嘘じゃなかったんだ……。でも……！)

今日はうちに泊まつてくんだよね、と言う匂におばあちゃんが、そうさせてもらうよ、明日ゆっくり帰るとしよう、とうなずいてるので、一夜の猶予はありません。

(おばあちゃんが小屋に帰つてアイツと鉢合わせしたら、マズい……)

「ほらタカ、赤ずきん脱いできて、お料理運ぶの手伝つてちょうだい！」

お母さんが腕を振るつたたくさんのごちそうを囲んで、夕飯の時間です。旅をしてきたお婆ちゃんの物珍しい話には場はおおいに

盛り上がりました。

ただ、タカヤだけはどこか上の空で、大好物のはずの鳥の唐揚げにもあまり箸が進みません。

「ところで、あの群狼団の連中がついにお縄になったの、知ってるかい？」

「?!」

タカヤは思わず箸を取り落とししました。

山の向こうの温泉から帰ってくる途中には王様の住む城下町があります。三日前そこを通ったときに、広場で群狼団の首領をはじめとする十数人が公開処刑されるのを見たのだとおぼあちゃんは言いました。

「首領の男は、たいそう恐ろしげな面構えの大男でね……」

(!!)

縛り首にされるときは断末魔の音がまるで不気味な獣のようで、兵士が数人がかりでようやく取り押さえてむりやり首に縄をかけて……と、微に入り細を穿つおぼあちゃんの語りには、匂とお母さんは青ざめて無言です。

「数十人いた団員は捕縛されるときに過半数が殺されちゃったつたらしいね。生きて捕まったヤツらも全員処刑されたそうだよ。残党はほとんどいないって話だ。」

そりや壯観だったよ、太い木の柱にむくつけき男どもが十何人も、ぶらぶら吊るされてるんだから。

一人二人、手負いで逃げ続けているのがいるらしいけど、捕まるのも時間の問題だろ。捕まったら、間違いなく縛り首だろうね。あれだけ恐れられた群狼団も、末路はあつけないもんだ」

タカヤはごくりと唾を飲み込みました。

(アイツ……自分がリーダーだとか森に仲間が大勢潜伏してるとか、嘘ばっかじゃねえか……!)

よく考えてみれば、身体は大きいとはいえ自分とそう歳も違わないのに天下に知られた盗賊団のリーダーだなんて、話に無理があります。森に部下が潜伏しているなら身の回りにおいて警護させるはずですし。

(でも、捕まったら、……縛り首……)

デザートもろくに喉を通らず、タカヤはすっかり暗くなった窓から森の方角をぼうっと眺めるのでした。

食後、お母さんが匂と一緒に外のお風呂に行っているとき、隣のおじさんがお父さん呼びにきました。緊急で村の寄り合いがあるそうです。二人は連れ立って慌ただしく出かけて行きました。

「タカヤ、ちよつとこっちにおいで」

「なに、おぼあちゃん……?」

暖炉の側のロッキングチェアに腰掛けたおぼあちゃんに手招きされ、ぼんやり物思いに耽っていたタカヤは気を取り直して近づいていきます。タカヤの耳の間の短い髪を硬い手のひらで撫でながらおぼあちゃんはどこかしみじみと言いました。

「ちよつと見ない間に、なんだかずいぶん物静かになっちゃまって、どうしたんだい? それに、よく見なきやわからないだろうが、お前の耳の地肌の色、前と違うようだよ……」

「……え?」

毛に隠されてわかりにくいだろうが綺麗な桃色になってるよ、尻尾も見せてごらん、と、おもむろにスカートをめくられます。

「やっぱり……! ふわふわの立派な尻尾になってるじゃないか。」

「?!」

猫のようにするりと細かったはずのタカヤの尻尾は、ふわふわとポリリユームのある、まさに狼のような尻尾に変わっていました。

「なんだい、自分じゃ気づいてなかったのかい？」

うなずいたタカヤは自分でそつとさわってみました。以前とは違うのがはつきりわかります。

「——タカヤ、お前、恋をしたんだね？」

「こ、恋?!、…恋って……そんな……オレ……!」

「……ばあちゃんも、お前にやまだちよつと早いような気がするけど、ねえ……」

耳の色が変わり、尻尾の形状が変わる——それは赤ずきんの仔の性成熟を意味しているのです。

「村に赤ずきんの仔が生まれたのも久しぶりだからねえ。尻尾は普段はスカートに隠れてるし、誰も気づかなかつたんだろう……」

まあ、そういう相手に出会つちまつたんなら仕方ない。……お前にとつて辛い恋にならないように、ばあちゃんは折るしかないね。」

(オレ、恋なんて、してねえ……! アイツは——! ……っ!)

混乱しながらも何か言おうとしたそのとき、お母さんと匂がお風呂から戻ってきて、タカヤは口をつぐみました。

昼間の暖かさから一転、その夜は酷く冷え込みました。初雪になるかも、とおばあちゃんとお母さんが話しているところに、お父さんが帰ってきました。

「どうやら群狼団の残党が一人、森に潜んでるらしい。明日早朝から村の男総出で搜索することになった。母さんも、一人で帰つたら危ないから家に来てくださーいよ、そいつが捕まるまで。」

それを聞いてタカヤの心臓は、たちまちどくんどくと音を立てはじめました。

(明日早朝……! アイツが捕まって、そんなですべて終われば、それで万々歳じゃねえか。)

なのになんで——こんなに胸が、苦しい……!

今日、数時間前、自分が肌をふれ合わせた相手が、明日になれば捕まってみじめに殺される——。

でも、無理やり自分を犯し、騙していた相手です。お尋ね者の凶悪な盗賊なのです。幸運にもおばあちゃんは無事でしたけど、今までに人を傷つけたり、殺したりしたかもしれませぬ。

タカヤを抱くときだっていつもひどいことばかりするのです。やさしくされたことなんてただの一度もないのです。

——それなのに。

皆が寝静まった真夜中、タカヤはベッドから抜け出しました。音を立てないように着替えてそつと寝室を出ます。真つ暗な部屋の中、手探りで空の籠を壁のフックからとりました。暖炉の横の棚、一番上の引き出しを開け手探りでお金を全部つかみだします。(お父さん、お母さん、ごめんなさい……)

台所でパンを見つけて籠に入れ、足音をしのばせて扉を開け、外に出ます。納屋に回って、吊るされているハム、サラミ、ベーコンを手当たり次第どさどさ籠に突っ込んで、後をも振り返らず森のほうへと駆け出しました。

(真夜中にどこに行くの? 赤ずきんの仔!)

(そんなに急いで、転んでしまうよ!)

(危ないよ、赤ずきん！森の中には、本当の狼がいるよ……)
やがて、真つ暗な夜の空からは雪がはらはらと舞い落ちはじめました。通い慣れた道だから迷うことはありません。息せき切つて先を急ぐタカヤの吐く息は真つ白です。

(早くしねエと……！)

焦りに何度も足がもつれて、転びそうになりました。

小屋に辿り着いて、水色の扉を思い切りどんと拳で叩きます。

「元希さん、オレ、タカヤだ……開けるよ！元希さん、オレ一人だ！」

しばらく経ってから、引き戸の内側でつかえ棒が外され、ほんの少し戸が開けられました。ぐつと手首をつかまれ、中に引きずり込まれます。

「——なんだお前、こんな時間に……。お子さまはおねんねの時間じゃねえの？」

手にしたランプをテーブルにトンと置いた上半身裸の元希に、扉を背にしたままタカヤは叫ぶように言いました。

「元希さん——アンタ、嘘ばっか言いやがって……！」

群狼団の生き残りは全員王都で縛り首になったって……首領の大男が処刑されるのも見たって……！

「それで、明日の朝には、ここにも、追っ手が来るんだ!!」

元希は振り返り、びくりと眉を上げて、フードや肩にきらめく雪の粒を乗せた赤ずきん姿のタカヤをじいつと見ました。

引き込まれそうに静かに暗く、きらんと光る、二つの目……。

「……へえ。そんでタカヤ、わざわざ真夜中に抜け出してオレにそれ教えに来たのかよ？ 真つ青な顔しちまつて。」

何度もタカヤを殴り、抱きしめた、その腕が自分の方に伸ばされ、人指し指で一本でくいつと手招きされると、糸に引かれるよ

うにタカヤは元希に一步一步近づきました。

「そうだ。盗賊団のリーダーなんて、大嘘だ。」

逃げる途中でケガしたオレは仲間だと思つてた連中に簡単に見捨てられた。オレには見込みがあるって可愛がつてくれた頭領のために、それまでさんさんカラダ張つてきたのに。やつぱ悪人の紳なんて信用できねーってことだな。単に放り出されるどころか逃走経路がバレねエようにつて殺されそうになったからよ、襲つてきたヤツぶつ刺して逃げた。

無我夢中で走つて走つて森に迷い込んで、食いもんもねエしもう終わりかと思つたときに、この小屋を見つけた。誰もいなくてホント助かったぜ。あんときの弱り切つたオレだつたらお前のばあさんも倒せたかどうかわかんねー。」

「元希さん……」

なんにもおかしくないのに、元希はニヤニヤと唇をつり上げて笑っています。

「お前だつて、オレのこと、憎んでんだろ？大嫌いだろ？捕まつて縛り首になつちまえばせいせいすんじやねーの？ ああ？」

その目の荒んだ暗い光、捨て鉢で投げやりな表情にタカヤは胸がずきんとしました。

(そうだ……こんなヤツ……そのはずなのに、それなのに……オレは——)

向かい合つて立つた元希を見上げるタカヤの眉間にはぐつと皺が寄っています。

(わけがわかんねエ……！)

悲しみ、苦しさ、怒り、よくわからない感情がごちゃごちゃに胸にこみ上げて、頭が熱くてたまらない、とタカヤは思いました。

「アンタが死んだら、——イヤだ」

白くなるほど強く握った両手の拳は震え、絞り出した声までも少し震えていました。

数秒間、きよとんした顔で目の前のタカヤを見つめていた元希は、それから堰を切ったように大笑いしはじめました。

うわっはっは、マジかよ、おま、ぶわっはっはっは……、タカヤを指差して、のけぞって涙をこぼさんばかりに身体を揺らして爆笑しているのです。

最初、呆気にとられていたタカヤですが徐々に、ふつふつとたまらなくムカつきが沸き上がってきました。

(なんなんだ、コイツは……！)

タカヤがいよいよぶち切れる寸前、ふつと真顔になった元希は、目の前のちいさなタカヤの両肩をぐつとつかんで引き寄せ、素肌の胸にギョツと抱きしめて耳元に口を寄せて言いました。

「——タカヤ、お前、オレのこと好きだろ。」

「……っ！」

レイプでバージン奪われた相手にほだされちまうって相当「——途中で情が深い」んだな……赤ずきんってのは……、元希はそう言っただけで、両方の獣の耳についばむように口づけから、うなじに手を回して顔を上向かせます。

ゆつくりと元希の整った顔が上から近づいてきて、音もなく唇に唇が重ねられました。

二人の、はじめてのキス——くちゅ、と濡れた音がして、元希の舌がタカヤの口の中に入ってきます。湿った粘膜がふれあう感触に背筋がぞくつとして、ちゅうつと強く舌が吸われて上下から軽く歯を立てられると、タカヤはもう腰が砕けそうです。

(ああ、まるで食べられてるみたいだ。オレなんかよりこの人のほうがよっぽど狼みてエだよな……。肉食獣の光る目でいつもオレを動けなくさせる。貪り食われんのを震えながら待ってるのが、こんなにきもちいなんて、オレはやっぱりおかしくなっちゃった。この人がオレを、おかしくしちまったんだ……)

長い長いキスの後、唇がようやく離れるとき、透明な糸がつうつと二人を繋ぎました。

「オレと来るか、タカヤ——」

今は強く爛々と光を放つ切れ上がったまなざしの奥に、何を見ただのか。タカヤは無言のままうなずいていました。

愛する家族も生まれ育ったふるさともすべて打ち捨てて、流浪の孤独な獣との爛れた道行きを選んでしまうなんて——

ああ！ ちいさなタカヤはなんておばかさんなのでしょう！

「その赤ずきんは、ここらじや目だつな」

タカヤは古い記憶をたよりにダンスを開けて、グレーのマントをとりだしました。やはりフードがついていて、長さも十分です。

翌朝、村人たちは、森の中の小さな小屋のベッドの上に、きちんとたたまれた赤ずきんが残されているのを見つけました。

その後の元希とタカヤ、二人の行方を知る者は、誰もいません。

End.

あーあまら
ひたーひたー

ど
が

ん!

はるあべあがずきん あにた

あまら
あまら
あまら

よく
きたね...

わあ
あつ

あまら
あまら
あまら

あまら
あまら

...

あまら
あまら

なんが
あまら

あまら
あまら

ちーんちーんちーんちーん
ちーんちーんちーんちーん

あつた

あれだー！
オシロの顔が
よく見える
的なやつ！

ちーんちーんちーんちーん
ちーんちーんちーんちーん

ギッ！

えー…
オシロの音がよく
聞こえるやつ！
増えた的な…っ

あつた

ちーんちーんちーんちーん

なんが
すっげえ

ちーんちーん…

…

おぼろげ...

おぼろげ

おぼろげ...
おぼろげ...

おぼろげ

おぼろげ...

おぼろげ

おぼろげ...

おぼろげ

おぼろげ
おぼろげ

おぼろげ...
おぼろげ...

あ...
ん...

おぼろげ
おぼろげ

?! バしし...

やらはははは
またいたがった
Scen

びゃっ

は?!
ちがっ...

なんがオしき
成長したみてえ
なんだよなっ

びらあ

びまっ

ん♡

わーわー
わーわー
わーわー

妻直に
なれよ...

なっ

ん...

#HITあへへ
#NOに...

ちかー

ちかー

ん...



びびびび

びびびび
びびびび



あースゲ...

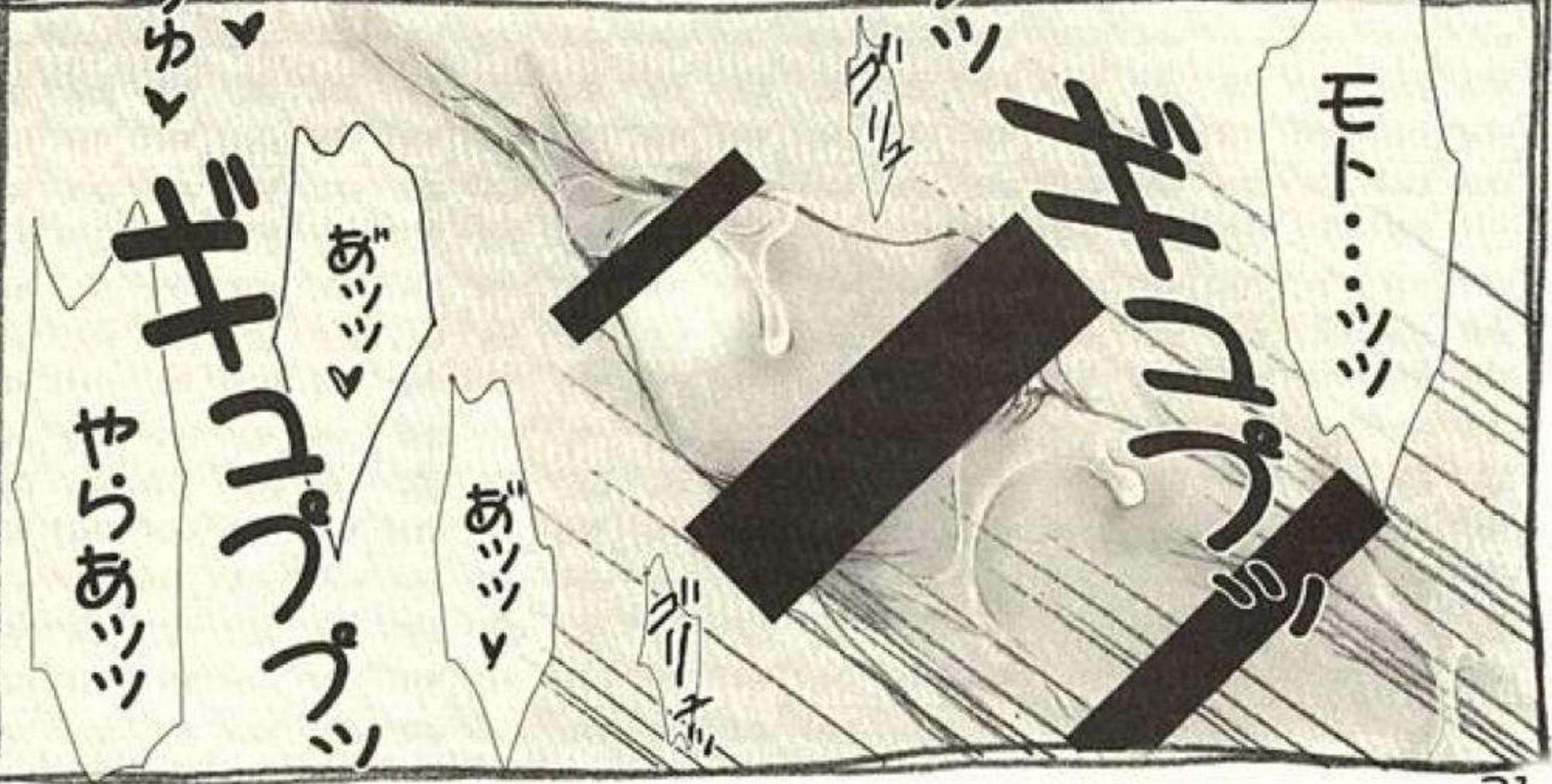
びびびび

びびびび

びびびび

スゲーイイよ
ワカサカワ...

ぬちゅ
ぬちゅ



びびびび

びびびび

びびびび

びびびび

びびびび

びびびび



シシシ
シシシ
シシシ

シシシ

ニギニギ
ニギニギ
ニギニギ

あー

ニギハフツ

ニギツツ

あ~~~~

から

たか

ふん

お
スゲー

...

お
お
お

ん

お

お

入れたい

お

お

お
お

うわわわわわ

その頃の猟師

あつあつ
あつあつ
たかあつ
せききあつあつ

ふみきおばあさん

むぐぐ

むぐ~

だ————ツツ

助けて!!

待って!!

え、ちよ

花井?

見てない!

見ながった!

オしは向せ

見ながったアア!!

おしまい♡



HARU*ABE
Little Red
Riding Hood

NATURAL DISTANCE mail: yukiyuki6948@yahoo.co.jp pixiv ID: 2374770
A Cake of Soap: ACOS mail: kawaiiyatsudayo@yahoo.co.jp pixiv ID: 7986395

印刷: 太陽出版株式会社 発行日: 2015/05/17
無断転載・無断複製, WEB上へのアップロード, ネットオークションへの出品等はお容赦ください。